

2020年3月期

関西大学審査学位論文

自閉スペクトラム症のアセスメント

—診断閾下の **ASD** を対象としたスクリーニング尺度の開発—

関西大学大学院心理学研究科

10D8505 西藤奈菜子

論文要旨

自閉スペクトラム症（Autism Spectrum Disorder：以下、ASD とする）は、社会的コミュニケーションおよび対人交流における困難さと、興味の限局や反復的な行動様式を主症状とする発達障害の一つである。ASD への社会的な関心や認知度の広まりとともに、ASD の診断基準に合致する子どもには、早期の段階から様々な支援が行われるようになってきた。その一方で、ASD の診断基準に満たないまでも、一定の ASD 特性を有するがために不適応に陥り相談機関を受診するような青年期以降の ASD、いわゆる診断閾下 ASD への適切な支援の方向性が医療だけでなく、様々な領域において課題となっている。適切な支援方針を検討するにあたり、診断閾下 ASD を正確にアセスメントすることが求められる。しかし、日本で使用可能な、青年や成人の診断閾下 ASD のアセスメントに特化した精度の高い尺度は見当たらず、これらの研究・開発は緒についたばかりである。

本研究は、様々な領域で実施可能な実用性の高い、診断閾下 ASD のスクリーニング尺度の開発を目的に行った一連の研究を示すものである。本論文は、第 I 部（第 1 章）、第 II 部（第 2 章、第 3 章）、第 III 部（第 4 章、第 5 章、第 6 章）、第 IV 部（第 7 章）の全 7 章で構成されている。

第 I 部では、ASD のアセスメントについて概観し、本研究の目的を提示した。

第 1 章において、自閉症概念の変遷や診断閾下 ASD の臨床的諸問題を明確にし、診断閾下を含めた ASD のアセスメントの現状について、先行研究に基づき概観した。また、診断閾下 ASD のアセスメントの課題を踏まえた上で、本研究の 2 つの目的、①既存の心理検査による診断閾下 ASD のアセスメントの検討、②診断閾下 ASD を対象とした新たなスクリーニング尺度の開発について述べた。

第 II 部では、本研究の目的の一つである、既存の心理検査による診断閾下 ASD のアセスメントについて検討した。

第 2 章において、従来から ASD の評価尺度として使用されてきた自記式質問紙である AQ 日本語版と、養育者面談評価尺度である PARS-TR の、診断閾下 ASD に対するアセスメント精度を検討した。精神科を受診した患者を、ASD の診断基準を参考に、閾下 ASD 群（ASD の診断基準を部分的に満たす群）と非 ASD 臨床群（ASD 以外の精神疾患を有する患者群）の 2 群に分割し、両群間の AQ 日本語版と PARS-TR の得点について比較検討を行った。その結果、AQ 日本語版では下位尺度も含め、有意差は認められなかった。PARS-TR

では、幼児期ピーク得点および現在得点で有意差が認められ、診断閾下 ASD と他の精神疾患との鑑別への有用性が示唆された。感度や特異度を踏まえると、PARS-TR の幼児期ピーク評定が診断閾下 ASD の鑑別に最も有用であり、ASD が診断閾下の場合でも、幼少期の行動特性を丁寧に検討することが重要であると考えられた。

第 3 章では、対人場面における課題が反映されやすく、ASD の対人交流の特徴の把握に有用であると考えられる P-F スタディの、診断閾下 ASD を対象としたアセスメントにおける適用可能性について検討した。第 2 章と同様に、閾下 ASD 群と非 ASD 臨床群を設定し、P-F スタディの回答について、量的・質的の両面から分析を行った。量的分析の結果、閾下 ASD 群は非 ASD 臨床群に比して評定不能反応（U 反応）が多く認められた。閾下 ASD 群の U 反応の質的分析の結果、「対処困難」「状況承認」「自己本位」「状況誤認」の 4 つの特徴が認められた。P-F スタディ全 24 場面に対する回答内容についての質的分析では、「過度な他責」「共感に乏しい自己主張」「状況に不適當な発言」「違和感のある語用」の 4 つの特徴が認められた。閾下 ASD 群は非 ASD 臨床群に比して、U 反応の「状況誤認」、回答内容の「状況に不適當な発言」「違和感のある語用」が多く認められることも示された。これらのことから、P-F スタディには、診断閾下 ASD が有する一見しただけでは表面化しにくい対人交流の課題が反映されやすい可能性があり、精神症状の背景にある診断閾下 ASD の把握に有用であると考えられた。

第 II 部の結果から、既存の心理検査の使用は、診断閾下 ASD の評価において有用である可能性が示唆された。ただし、これらの心理検査の課題として、養育者評価の必要性や実施時間が挙げられ、青年や成人を対象としたスクリーニングとしては実用的ではない可能性があると考えられた。そこで、第 III 部では、時間的・人間的な制約の多い支援現場で簡便に使用できる診断閾下 ASD を対象としたスクリーニング尺度の開発について検討した。

第 4 章では、自記式質問紙による ASD 特性評価に関する課題である自己理解力や社会文化的影響を考慮した、診断閾下 ASD に適用可能な ASD 特性評価尺度の作成を試みた。仮尺度への因子分析の結果、厳格な規則性や固執性に関する「杓子定規な行動様式」、その場の空気や雰囲気を読み取ることの難しさ、相手と自分の状況理解の食い違いに関する「状況察知力の弱さ」、対人交流の回避や不得意さに関する「消極的な対人交流」の 3 因子構造、全 38 項目が認められ、これらの因子に負荷した項目から新たに ASD 特性評価尺度を構成した。検証的因子分析、AQ 日本語版との相関分析、再検査信頼性の検討の結果、この尺度に関する一定の信頼性と妥当性が示され、ASD 特性の評価に有用である可能性が示唆され

た。また、閾下 ASD 群、非 ASD 臨床群、一般群を対象に、ASD 特性評価尺度の判別的妥当性を検討したところ、閾下 ASD 群と一般群の合計得点において有意差が認められた。ASD 特性評価尺度の閾下 ASD 群に対するアセスメント精度を検証したところ、一次スクリーニング目的のカットオフ値として 44 点、二次スクリーニング目的のカットオフ値として 60 点が望ましいことが示唆された。さらに、ASD 特性評価尺度の合計得点において性差が認められなかったことから、表面化しづらく見逃されやすい ASD 女性の特徴を評価できる可能性も示唆され、診断閾下を含め、比較的軽微な ASD 特性のスクリーニングにおいて有用な可能性が示された。

第 5 章では、第 4 章で作成した ASD 特性評価尺度に加えて、さらに精度の高いアセスメントを実施するために、ASD の社会性の課題に焦点を当て、ASD 者本人も気づいていないコミュニケーションの微妙な齟齬を評価する方法を検討した。ASD 特性が反映されやすいと考えられる対人コミュニケーション場面を設定し、その場面での応答を評価する尺度として、コミュニケーション状況評価尺度を作成し、閾下 ASD 群、非 ASD 臨床群、一般群における比較を行った。その結果、3 群間において有意差は認められず、閾下 ASD 群であっても、各場面において設定した、適切と思われる項目への回答率は高く、当該場面で周囲が期待する言動を示すことは可能であることが示唆された。本尺度は、コミュニケーションスタイルやスキルの影響を受けている可能性が高く、これらには性差が大きく関連していると考えられた。そこで、性別ごとに、コミュニケーション状況評価尺度と ASD 特性との関連を検討するために、ASD 特性評価尺度得点のカットオフ値に基づき高群と低群に分割し、回答内容を比較した。その結果、性別に関わらず、ASD 特性高群は低群に比べて、誤りを指摘されるような場面で、謝罪の言葉を選択しない者が多いことが示された。さらに、ASD 特性高群は、コミュニケーション状況評価尺度の全場面合計得点も有意に高く、ASD 特性を強く有している者は、対人場面において齟齬を生じるような応答をしやすい可能性が示唆された。コミュニケーション状況評価尺度により、自己評価では社会性の課題を認識していない ASD 者のコミュニケーションの様相を評価できる可能性が明らかになった。

第 4 章、第 5 章では、診断閾下を含め ASD の簡便なアセスメント方法について検討してきたが、ASD 特性のアセスメントにおいては、特性の有無だけでなく、社会的な適応状態についても評価する必要がある。なぜなら、ASD 特性は、個人の能力や学習、および取り巻く環境によっては強みとなり、必ずしも特性の度合いにより、適応度を判断することは適切でないからである。例えば、一般的にこだわりと言われる限局的な興味関心は、好奇心を

もって一つのことを追求することとなり、特定の分野で思いもがけない成果を発揮することがある。支援につながるアセスメントを行うためには、現在の社会的な適応状態についても考慮する必要がある。そこで、第6章では、第4章、第5章で作成した尺度と併せて簡便に用いることができるような、ASDの社会適応を評価する尺度の作成を試みた。仮尺度の因子分析の結果、相談相手や居場所、ストレス対処方法の有無など、ソーシャルサポートに関する「安心感」、自己肯定的な認知に関する「肯定感」、心身の症状に関する「適応感」の3因子構造、全15項目が得られた。これらの因子に負荷した項目に基づき、新たに社会適応評価尺度を構成し、検証的因子分析、再検査信頼性の検討の結果、この尺度に関する一定の信頼性と妥当性が示された。また、本尺度における閾下ASD群と一般群との比較検討では、閾下ASD群が有意に低得点を示し、診断閾下ASDは、社会適応に必要なソーシャルサポートや自己肯定感を有しておらず、日常生活に支障が生じやすい可能性が示唆された。社会適応評価尺度の閾下ASD群に対するアセスメント精度を検証したところ、カットオフ値として41点が望ましいことが示された。第4章、第5章で作成した尺度と併用して、社会適応評価尺度を用いることで、ASD特性の有無や対人コミュニケーションの様相だけでなく、日常生活上の支障の程度から個人の強みとなるリソースまで幅広く評価することができ、適切な支援にとって必要な情報を収集できると考えられた。

第IV部では、これまでの研究を総括し、本研究の意義や課題について考察した。

第7章においては、まず、本研究で開発した診断閾下ASDを考慮した尺度（ASD特性評価尺度、コミュニケーション状況評価尺度、社会適応評価尺度）の有用性について、診断閾下ASD者12名の各尺度得点に基づき事例的な検討を行った。その後、本研究を総括した上で、課題と展望について述べた。

本研究で得られた上記の結果は、診断閾下ASDのアセスメントにおいて重要な示唆を得られたと考えられる。診断閾下ASDの青年や成人は、対人コミュニケーションにおいて生じる齟齬や周囲との違和について、理由がわからないまま、自身の性格特性や対人スキルに原因を帰属する傾向にある。本尺度を使用した正確なアセスメントに基づき、適切な心理教育を行うことによって、抑うつや不安といった二次的な症状の予防や悪化の防止に寄与すると考えられる。今後、診断閾下ASDを対象とした研究が増え、社会全体で、ASD特性とそれに伴う困難や課題、さらにASD特性の活かし方や強みへの理解が深まり、診断閾下ASD者の生きづらさの軽減につながることを期待される。